

重症心身障がい児とその家族にとっての保育行事の意味とは

四天王寺和らぎ苑児童発達支援ひまわり
保育士 高下 祥

【はじめに】

発達心理学者エリクソンは、乳児・幼児前期・幼児後期における“人格的活力”を「希望」「意思」「目的」と提唱した。

身体的・精神的発達に特色がある障がい児にとっても同様であり、“人格的活力”＝“生きる力”を順序立てて培っていくことが発達に繋がっている。

人格的活力の「希望」とは、欲求に対して適切に答えてもらうことによる安心と信頼から得られるものであり、人的環境の中でも家族の存在が深く関係している。家族は子どもの発達を感じるにより、育児に対して積極的に取り組める活力が得られる。しかし、重症心身障がい児（以下重症児）は重度の障がいによって、発達していることに気づきにくいことが子どもの発達に影響する。

児童発達支援（重症児対象母子通園施設）での、子どもとその家族の活力に関係する保育行事の実践を通じ“重症児とその家族にとっての保育行事の意味”について報告する。

【実践】

特に子どもの発達において家族の協力が必要となる「運動会」での実践を報告する。

○発達の目標…「動くこと」による発達

発達において「動くこと」は、「知覚」「認知」「運動」「社会性」の発達の基盤になる。

「運動会で子どもがもっている運動能力を発揮する」を目標とし、姿勢運動適応能力と表出手段を把握し練習に取り組む。重症児においては子どもが示すわずかな変化を読み取り、人的・物理的環境支援を強調して発達を促す。

姿勢・移動器具設定、おもしろいテーマ・競技内容設定、コンディションを整える等、専門スキルから発達を引き出す。毎回のフィードバックにより家族と発達を共有する。

【事例】

○対象者A君（2歳児、人工呼吸器・口腔持続吸引・経鼻チューブ等）とA君の母親

通園以前は「子どもとどう関わってあげたらいいのだろう」と不安を抱えていた母親。運動会1年目は体験見学として参加、2年目は覚醒が落ち眠っていることが多かったが、起きて楽しく参加できたことを互いに喜んでいた。3年目は練習を通じて、自ら手を動かしスイッチを押して移動ができた。母親は昨年度と違い自ら操作する姿を見て、練習での姿勢や設定に意見し、家庭でも練習を行っていた。母子共に運動会に向け積極的に参加し、何より楽しんでいる姿が見られた。

【考察】

繰り返しの練習からスイッチと移動の因果関係を理解し、自ら移動しようとする操作性と認知面等の発達が見られた。それにより母親は、子どもの発達＝できる姿を実感することが育児の活力となり、更に子どもの発達に繋がっていった。

【まとめ】

子どもにとっての人格的活力が「希望」であるように、その家族にとっての育児の活力も「希望」である。

保育行事は、子どもとその家族に「希望」を得える。重症児の発達を支援する上で、日々の小さな変化を感じられる年間の一定した行事は有意義である。